

令和五年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

たとえば、美術の時間に、「好きなように描きなさい」と言われて、好きなように描くのは、とても楽しいものだよね。上手だろうが下手だろうがおかまいなしに、自分が描きたいように描いたら、それだけですごく満足感があるんじゃないか。

逆に、自分がどう描きたいのかわからないまま、なんとなく人の真似をして描いたり、上手に描かなくちゃと思って描いたりするのは、ちっとも楽しくない。たとえそれでいい点をもたらしたとしても、なんだか空しい感じが残るんじゃないか。

また逆に、君が人の描いた絵を鑑賞する側にまわるとしよう。確かに上手にまとまっではいるのだけど、なんだかどこにもあまりそうな感じで、つまらなく、この人ほんとはどう描きたかったのかがよくわからない、そういう絵と、決して上手とは言えないけれども、迷いがなくて、独創的で、この人はこれが描きたかったんだということがはつきりとわかる魅力的な絵とがあるのに気がつくだろう。①両者の違いは、描いた人の、心の構えだ。

本物と偽物にせものという言い方がある。本当のものと、似せのものだ。よく、一流のブランド品なんかは、類似品にご注意下さいってあるだろ。つまり、オリジナルとコピーだ。本物は本物だから本物だけであり得るのに対して、偽物は偽物だから本物がなければあり得ない。自分ひとりであることができない。だから、②独自であるということが、本物であるということの意味だ。

A、この本物と偽物という二種の区別は、社会的に問題にされやすいブランド商品だけではなくて、すべての物、すべての事柄、すべての分野について言えることなんだ。絵画や音楽、芸術の諸分野から、文章表現による文学や思想、学問の諸

分野まで、人間の行なうすべてのことについてだ。そして、人間の行なうことのすべては、その心の行なうことなのだったね。だから、本物か偽物かというのは、その人間の心の構え、つまり、その人が本物か偽物かということに他ならないんだ。ア

(中略)

独自であるということが本物であるということの意味だと言ったけど、これはやさしいようで難しい。いや本当はちっとも難しくはないのだけど、いつもすごく誤解されているんだ。よく、個性的な人になりなさいとか、個性的な人になりたいとか言うよね。でも、人は、個性的になろうとして個性的になるわけじゃない。B、そんなことをしなくたって、現にすべての人は個性的だからだ。同じ人は二人としていないからだ。

C、個性とは、個性的になろうとしてそうなるようなものであるなら、そこには必ず他人との比較があるはずだ。人と同じようにはするまい、人と同じようにはなるまいという、他人を気にする気持ちがあるはずだ。だったら、どうしてそんな人が個性的であるはずがあるだろう。本来のその人がそうである仕方だ。③そうであるのではないからだ。それできつとそういう人は、わざと変わったことや珍しいことをして、自己顕示する、いわゆる※奇をてらう振るまいをするだろう。そういう振るまいを見て、君は、わざとらしいなと感じるだろう。個性的であるということと、人と違おうとするということとは、まったく逆のことなんだ。イ

でも、もしも君が、本物と偽物の見分けがまだうまくつかなくて、そういう人やそういう人のすることを個性的だ、彼は独自の人なんだと思ってしまうとしたら、君はこれから自分の見る目を鍛えていかななくちゃダメだ。たとえば一流のブランド品

なんかは、みんながそれを一流だ、いいものだと言うから一流になっただけで、その商品そのものは、じつは※ちやちな偽物かもしれない。流行の書物や人物なんかは、それが流行するというだけで、偽物である場合がほとんどだ。そうは言っても、本物を見抜ける人は世の中には稀だから、みんながいいと言っているという理由で、それがいいと思ひ込んでしまっているだけなんだ。でも、本当にいいものを知らないで、④偽物にだまされたまんまでいるなんて、ばかばかしいと思わないか。

本物を見抜ける目をもとう。本物を見抜ける人間になろう。そのためには、いいかい、君が本物の人間にならずにちゃダメなんだ。本物を見抜けるのは本物だけなんだ。ここには動かせない対応があるんだ。

人の真似をする、逆に、人の真似はしなくても、あえて人と違おうとする、それは偽物だと言った。どうしてそうなるかというと、本当にしたいこと、どうしてもそうしたいことが、その人にはないか、あるいはわかっていないからだ。D、本物はそうじゃない。人が何と言おうが、誰にどう見られようが、彼はそれがしたい。彼はそうするしかできないんだ。それをするのでなければ、彼にはもう生きてる理由なんかない。その意味で、彼はそれをするに命と人生のすべてを賭けているんだ。

たとえば、⑤ゴッホという画家の人生を見てごらん。狂人扱いされながら、事実ほとんど狂人になりながら、それでも描くことを決してやめないだろう。生活の苦しさなんか問題じゃない。なぜなら、絵を描くのでなければ生活する理由だってないからだ。普通の人は、何もそこまでしなくたってと思う。でも、そうじゃない。彼はそうするしかできないんだ。なぜそうするしかできないかと言えば、彼は自分を超えるものを見ているからだ。自分を超えた力に憑かれてしまっているからだ。㉮

もしもこれが、単に奇をてらうだけの絵かきだったら、人に評価されなかったり生活が苦しかったりしたら、すぐにやめてしまおうだろう。やめて、もっと人にウケて売れそうな絵を描くだろう。どうしてもせざるを得ないことのない偽物にとっては、自分の欲得だけが行為の※動機だ。彼は、自分を超えたものなんか知らない。本物の人はそういう力に衝き動かされて描いているなんてことは、知るよしもない。ここに人間の※墮落が始まる。でも、人間は墮落してまで生きている理由があるのだろうか。あとで考えよう。

徹底的に個性的であるゴッホのような人、自分がせざるを得ないからしていたそんな仕事、しかし万人に感動をもたすのはなぜだろう。いや、この言い方は正確じゃない。万人のうちのほとんどは、ゴッホは本物だとみんなが言うから本物なんだろうなど、感動した気になっているだけかもしれない。君がゴッホの絵を見て、本物だと思うか、感動するか、問題はそれだけだ。

もしも、ある人の仕事、ある人の姿が、他の人に感動をもたらすとしたら、それは、その人の仕事、その人の姿が、その人でありながらその人でない、その人を超えた何か大きなものに触れているからだ。だからこそ、それは、その人ではない他の人にも、感動を与えることになるんだ。もしもそれが、自分の欲得を計算して為されたような仕事だったら、どうしてそんなものが他人に感動を与えるはずがあるだろう。㉮

ところで、他人の仕事やその姿に感動できるためには、その人も、その人と同じ自分を超えた何か大きなものを知っている、共にそれを感じているのでなければならぬ。感動するということとは、共感するということに他ならないからだ。だから、ある天才の仕事に感動できるとしたなら、君は、天才だ。天才が何をしようとしていたのかを理解できるなら、君は天才だ。

天才を理解できるのは天才だけだという動かせない対応とは、両者が共に自分を超えた大きなもの、つまり⑥「天」を見ているということとで理解し合うということなんだ。「天」を見ない人、「天」を知らない人は、結局は天才を理解できない。

天才だなんて、そんな大それた才能は僕にはありませんって言いたいだろ。違うんだ、才能のあるなしは問題じゃない。そんなものは、二人として同じ人はいないという、個性の違いにすぎない。問題は、君が天才と共に天を見られる人であるかどうかということだ。天を見るとはどういうことか、もうわかるよね。ちつぽけな自分を捨てることだ。無私の人であることだ。君が自分を捨てて、無私の人であるほど、君は個性的な人になる。これは美しい逆説だ。真実だよ。人は、個に徹するほど天に通じることになる。この宇宙は、なぜかそういうつくりになっているからだ。

本物が偽物かという問いを理解するのも、やはり本物の人だけだ。偽物ばかりが※横行する今の世の中を生きてゆくのは、本当に大変だ。でも、偽物の人生を生きて死ぬよりは全然大変なことじゃない。だから、本物の人間になろう。君は、君だけは、本物を見抜ける本物の人間になろう。

(池田晶子 『14歳からの哲学』)

※(文中のことばの意味)

自己顕示 : 社会で自分を目立たせようとすること。

奇をてらう : わざと変わったことをする。

ちゃちな : いかにも安っぽい様子の。

動機 : 意志や行動の根拠。

墮落 : 人の性格や行ないなどがわるくなること。

横行 : 勝手気ままにふるまうこと。

問 1 文中の A D にあてはまることばを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア もしも
- イ けれども
- ウ なぜなら
- エ そして

問 2 線①「両者の違い」とありますが、「両者」とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 上手な絵と下手な絵
- イ まとまっている絵とよくわからない絵
- ウ 迷いがない絵と独創的な絵
- エ 魅力的な絵とつまらない絵

問 3 線②「独自であるということが本物であるということ」とありますが、その理由を説明している一文を文中からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

問 4 線③「そう」が指すことばを、文中から三字でぬき出しなさい。

問5 ———線④「偽物にだまされたまんまにいる」とありますが、世の中の多くはなぜそうなるのですか。「から」につながるように文中から十二字でぬき出しなさい。

問6 次の一文が入る最もふさわしいところを文中の□ア□エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

彼は彼であつて彼ではないんだ。

問7 ———線⑤「ゴッホという画家」が絵を描き続けたのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絵を描くことが生活する理由だから。
- イ 狂人になることを恐れなかったから。
- ウ 人生のすべてを賭けて成功しなかったから。
- エ どうしても他人に認められなかったから。

問8 文中の「ゴッホ」の例から、本物の芸術作品はどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生活が苦しい中で狂人になりながらも、絶対に売れたいと決意して描かれたもの。
- イ 描き手を超えた何か大きなものにふれていて、その人以外の他の人に感動を与えるもの。
- ウ 万人からは受け入れられないが、ごく一部の価値を知っている人だけにわかるもの。
- エ 描き手が鑑賞する人の気持ちになって、ある意味自分の思いを犠牲にして描かれたもの。

問9 ———線⑥「『天』」を見るためにはどうすればよいですか。文中から十一字でぬき出しなさい。

問10 文中の「本物」にあたるものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 流行していてみんなが言いと言っている。
- イ 他と比較することでその価値がずば抜けている。
- ウ 人と同じようにするまいと努力している。
- エ 人が何と言おうが人生を賭けて打ち込んでいる。
- オ 自分を超えた大きなものに触れている。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「わたし（美貴）は親の仕事がうまくいかなかったことで、私立から公立の学校に転校した。新しい学校ではすぐに梢という友達ができたが、心の中では以前通っていた清凜女子学院にもどりたいいつも思っており、公民館に飾った七夕の願いごとに「清凜にもどりたい」とこっそり書いた。その短冊を見た梢は「わたし」の本心を知って、ショックを受ける。

そしてある日の給食の時間、梢は食が進まない「わたし」に「お嬢様学校の豪華な給食を食べ慣れてるから、こんな貧乏くさい給食は食べたくないでしょう？」とみんなの前で言い放った。

私立学校から転校してきたことを誰にも知られたくなかった「わたし」は、自分の事情をクラスみんなにバラした梢に腹を立てたまま家に帰った。

自分の部屋に引っこむと、カバンを乱暴に放りだして、畳に倒れた。畳のにおいがいつもより鼻について、口で浅く息をしていた。

廊下で最後に見た、梢の顔。あのときたぶん、梢はわたしに謝ろうとしていた。だけどべつに、謝らなくてもいい。絶対に謝らせたりしない。これでもう、友達ごっこを続けないですむんだから。

「……せいせいしたわ、ほんと」

わたしは声に出してつぶやいてみた。なのに頭に浮かんできたのは、なぜか梢たちといっしょにいたときのことばかりだった。

た。教室でのおしゃべり、公民館の図書室の棚に積まれたおすすめの本、にぎやかにはしゃぎながら短冊を吊るすみんなの姿。違う、そうじゃない。教室で孤立したためにつきあっていただけで、わたしは本気であの子たちと仲よくなりたかったわけじゃない。無理に仲よくなりなくなつて、わたしのほんとうの友達は、清凜にちゃんという。

寝転がったままカバンをさぐって、携帯を取りだした。電源を入れて、画面をじっと見つめる。けれどきょうもまた、メールは届いていなかった。

いや、たしか清凜の中等科の期末テストは、七月になってからだった気がする。だとしたら、いまごろみんなテスト勉強で忙しくて、メールをしている暇もないのだろう。そう、きっとそうに違いない。

① わたしは自分に言い聞かせた。みつともないくらい必死に。

次の日から、わたしはひとりになった。教室でも部活でも、誰ともつきあわなくなつた。② ときどき梢が話しかけようとしてくるのがわかったけど、わたしは頑なに気づかないふりをした。

朋華も高梨さんも沢村さんも、わたしに関わってはこなかった。関わりあいを拒絶する空気を、わたしが発していたせいかもしれないけど、もともと彼女たちは梢の友達だ。梢と仲違いをしたわたしと仲よくする理由はない。

せいせいした。そんなふうに強気でいられたのは、最初のうちだけだった。

清凜女子学院に通っていたころは、友達がたくさんいた。こっちに来てからも、梢がすぐに仲間の輪に入れてくれた。自ら望んでひとりになってはじめて、わたしはひとりでいることの寂しさを知った。

ひとりぼっちのまま数日が過ぎて、七夕の日になった。公立

の中学でも、七夕の給食には七夕ゼリーが出るものらしい。それは紙製のカップに入った白いゼリーで、トッピングに星型の小さなゼリーが二個、^④申し訳程度に載っていた。

「……安っぽい」

わたしは誰にも聞こえない声でつぶやいた。それから、去年までの七夕ゼリーは、と思いだそうとして、もういいかげん嫌になった。

どんなに強く願ったところで、どうせもうわたしは、清凜にはもどれない。だからこうやっていちいちあのころといまをくらべるのは、ただ無意味につらくなるだけだ。

わたしはため息をついて、食パンに塗るイチゴジャムの小袋を開けようとした。するとそのとき、梢が「ねえ」とわたしに声をかけた。

話をする気はなかったのに、反射的にそちらを向いてしまうと、梢は遠慮がちに言った。わたしの七夕ゼリーを指差して。

「それ、くれない？」

わたしは啞然として梢の顔を見つめた。^③梢は上目遣いにわたしの返事を待っていた。

驚きとあきれがいらだちに変わり、けれど嫌だと返事をするのも癪で、わたしはゼリーのカップを乱暴に梢の給食のトレイに置いた。^④ありがと、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した。

まったく、あきれてものも言えないとはこのことだ。いくら食意地が張っているといったって、よりにもよってわたしの給食をほしがるなんて。

胸の中で軽蔑の言葉をならべながら、イチゴジャムの袋を千切ると、いきおいよく飛びだしたジャムがトレイを汚して、頭がカッと熱くなった。けれど怒りはすぐに冷えてしぼまり、同時に^⑤わたしの心も暗く落ちこんだ。

……どうして、あんな^⑥つつけんどんにわたしたりしてしまったんだろう。気づけばわたしはそう後悔していた。しょうがないなあ、と苦笑いでも浮かべて手渡していれば、それをきっかけに梢と仲なおりできたかもしれないのに、と。

強がってごまかすことはもうできなかった。梢と仲なおりがしたい。朋華たちともまた仲よくつきあいたい。それはわたしの本心だった。

たしかに梢はわたしが隠していたことをばらした。だけど、もともと悪いのはわたしだ。最初の理由がなんだって、梢はずっとわたしにやさしくしてくれた。わたしをひとりにしないでくれた。なのにわたしはつまらない意地を張って見栄を張って、梢のことを傷つけて……。

そんなことはもうとくにわかっていたのに、それでもまだ梢のことを避け続けている自分に、心底嫌気が差した。給食に手もつけず、机の下でぎゅっと両手を握りしめていると、^⑥騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた。

自分が泣きそうになっているのがわかった。けれど涙があふれる寸前で、「美貴」とわたしの名前を呼ぶ梢の声が耳に届いた。

梢のほうを向いたときには、無意識にまた不機嫌な表情になってしまっていて、わたしは心の中で自分を※なじった。けどわたしの不機嫌顔は、梢の持った皿を見た瞬間、驚きで塗りつぶされていた。

その皿のまんなかには、カップから丁寧に取りだされた七夕ゼリーが載っていた。しかもゼリーのまわりは、たくさんの星型のトッピングで飾られ、皿にはイチゴジャムでお洒落な模様が描いてあった。

その模様とトッピングのデザインには見おぼえがあった。勉強会のときに見た、高級スイーツの写真とそっくりだったのだ。

「うおつ、なんだその豪華ゼリー！」

足立くんが驚きの声をあげた。すると朋華が横から、「すごいでしょう、梢シェフのスペシャル七夕ゼリーよお」と自慢する。

「美貴、これ、美貴に……」

梢がおずおずとゼリーの皿を差しだしてきた。

「えっ、なんでわたしに……」

「その、この前のお詫びについていうか……美貴、すごく怒ってるだろうから、どうしたら許してもらえるか、みんなに相談したんだ。そしたら朋華がアイデアを出してくれて……」

梢が横目でとなりの朋華を見た。わたしもつられて朋華に視線を移すと、朋華は^㉞したり顔で言った。

「ほら、お金で買ったものをあげるのもなんか違うでしょ、この場合。それでいろいろ考えたんだけど、このあいだ美貴があの高級スイーツの写真をすごく熱心に見てたから、こういうのなら喜んでくれるんじゃないかなあ、って思って」

わたしは言葉を失ったまま、再び梢の顔を見た。梢は目を伏せて、わたしに謝ってきた。

「この前は、ごめん。美貴がづらいのはわかったのに、勝手にいらついで、美貴が秘密にしておきたいことをばらしたりして……」

「違う、梢はなにも悪くない。なのにお詫びなんてもらえないわ」

わたしはとつさにそう言っていた。けれど梢は、「いいから、あたしが美貴にあげたいの。だから、はい」と、ゼリーの皿を差しだしてくる。

わたしはためらいがちにその皿を受け取った。ゼリーを飾る星型のトッピングは、全部で十個あった。トッピングはひとつのゼリーに二個。梢と朋華のゼリーからは、トッピングがなく

なっていた。さらにとなりの班に目をやると、高梨さんが恥ずかしそうにほほえみ、沢村さんがいつもの無表情のまま親指を立ててみせた。それを見たわたしは、もう涙をこらえきれなくなってしまうた。

「どうよ美貴、こんなデザート、さすがに前の学校でも出なかったんじゃないの？」

朋華のおどけた科白に、わたしはうん、とうなずいた。当たり前だ。^㉟こんな特別なメニュー、どんな学校の給食だって、食べられるわけがない。

「ありがとう……それに、ごめんなさい」

^㊸ずつと言えなかったその言葉が、自然とわたしの口からこぼれた。

（如月かずさ 『給食アンサンブル』）

※（文中のことばの意味）

なじる …… 悪いところをとりあげて、せめる。

問1

~~~~~線①②③のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 申し訳程度

ア むだにおおげなこと  
イ 形ばかりで少ないこと  
ウ 存在感がないこと  
エ 見た目が悪いこと

② つっけんどんに

ア なげやりな態度で  
イ ふざけた態度で  
ウ とまどった態度で  
エ 強気な態度で

③ したり顔

ア 不思議な顔  
イ 照れた顔  
ウ かたい顔  
エ 得意な顔

問2

——線①「わたしは自分に言い聞かせた。みっともないくらい必死に」について、次の各問いに答えなさい。

(1) ここで使われている表現の方法と同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぼくには春風のようにあたたかな心を持った友がいた。  
イ ほんとうにうれしい。こんなところで会うなんて。  
ウ おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗たくに行きました。

エ 雨がようやくやんだ。西の空には大きなじ。

(2) このときの「わたし」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 孤立しても清凜には「ほんとうの友達」がちゃんといふことに安心している。  
イ メールを送ってくれない「ほんとうの友達」のことを疑ってしまい反省している。  
ウ テスト勉強中の「ほんとうの友達」をじゃましないようメールするのをがまんしている。  
エ 清凜にいるはずの「ほんとうの友達」が連絡をくれないことが不安になっている。

問3

——線②「ときどき梢が話しかけようとしてくるのがわかったけど、わたしは頑なに気づかないふりをした」とありますが、なぜですか。それを説明した次の文のA・Bにあてはまることばを、Aは八字、Bは五字でそれぞれ文中からぬき出しなさい。

A ために梢たちとつきあっていただけで、  
B を続けるつもりはないから謝られたくない  
という思いを示すため。

問4

——線③「梢は上目遣いにわたしの返事を待っていた」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 梢の態度として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア わたしをうかがう態度
- イ わたしを見下す態度
- ウ わたしにあまえる態度
- エ わたしに合わせる態度

(2) (1)で答えたものと同じような梢の態度を表した五字の表現を、これより前と後からそれぞれ一つずつ、文中からぬき出しなさい。

問5

——線④「ありがと、と梢が言ってきたけど、わたしはそれを無視した」とありますが、このときの「わたし」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今さらどんなふうにも梢たちと話せばいいかわからない。
- イ あえて「わたし」にたのんでくる梢を理解できない。
- ウ 梢に声をかけられたのはうれしいけれど素直になれない。
- エ 梢なんかに渡さずに自分で食べたほうがよかった。

問6

——線⑤「わたしの心も暗く落ちこんだ」とありますが、なぜですか。それを説明した次の文のA・Bにあてはまることばを答えなさい。ただし、Aは文中のことばを使って十字以内で書き、Bは文中から二字でぬき出しなさい。

A をのがしてしまったことを  
B したから。

問7 ———線⑥「騒々しいまわりの声が急速に遠ざかっていくのを感じた」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いらいらした態度をとる「わたし」に気をつかって、みんなが何も話せなくなっているということ。

イ 自分のことに夢中になりすぎて、「わたし」が周りを気にしなくなっていると感じたということ。

ウ 意地を張り続けたことで、みんなの心が「わたし」から離れていつていると感じたということ。

エ いつまでも素直になれないことが嫌になり、「わたし」がクラスメイトのそばから離れたということ。

問8 ———線⑦「こんな特別なメニュー、どんな学校の給食だって、食べられるわけがない」とありますが、「わたし」にとってどのようなところが「特別なメニュー」なのか。ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仲なおりをするためにみんなで相談して作られたところ。

イ 「わたし」が熱心に見ていたスイーツに似せてあるところ。

ウ 前の学校の給食でも見たことがないほどおしゃれなところ。

エ 梢や朋華などみんなの給食を材料にして飾られたところ。

問9 ———線⑧「ずっと言えなかったその言葉が、自然とわたしの口からこぼれた」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 梢たちの行動によって、悪いのは自分だと反省する気持ちだが、いつそう強くなったということ。

イ 梢たちの行動によって、仲間の輪に入れてくれた感謝を伝える決心が、やつとできたということ。

ウ 梢たちの行動によって、特別な七夕ゼリーのお礼を、なんのためらいもなく言えたということ。

エ 梢たちの行動によって、意地を張って言えないままだった本心を、素直に伝えられたということ。

問10 本文に登場する人物の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は環境の変化が受け入れられなかっただけで、はじめから梢たちの気づかいややさしさに気づいている。

イ 梢は「わたし」をひとりにさせないために仲間の意見をまとめ、リーダーとして積極的に朋華たちを動かしている。

ウ 朋華はアイデアを出したり場をなごませる発言をしたりして、みんなの中に明るい雰囲気を作り出している。

エ 高梨さんと沢村さんは発言することなくひかえめではあるが、「わたし」のことをあたたかく受け入れている。

三

次の和歌の（ ）にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ただし、同じものを二回以上使えません。

- ① み吉野の山の（ ）風さ夜ふけて  
ふるさと寒く衣打つなり
- ② 奥山に（ ）踏み分け鳴く鹿の  
声聞くとときぞ秋は悲しき
- ③ いにしへの奈良の都の八重（ ）  
けふ九重ににほひぬるかな
- ④ ひさかたの光のどけき（ ）の日に  
しづ心なく花の散るらむ
- ⑤ 天の原ふりさけ見れば春日なる  
三笠の山に出でし（ ）かも
- ア 春      イ 秋      ウ 月      エ 山  
オ 川      カ 桜      キ 紅葉

四

次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① うわさをヒテイする。
- ② ジュウオウ無尽に走りまわる。
- ③ 登山の計画をネる。
- ④ センモン家の話を聞く。
- ⑤ 毎月のヤチンを支払う。
- ⑥ 綿花を栽培する。
- ⑦ 干害になやまされる。
- ⑧ 雑木林に逃げこむ。
- ⑨ 現役を退いた選手。
- ⑩ 筋道を立てて話す。

これで問題は終わります。